

ニョロ語の人名

梶 茂樹[†]

キーワード： ニョロ語、ウガンダ、人名、無文字社会、
コミュニケーション

1 はじめに

人名は、無文字社会においては、口承文芸の1ジャンルとして多くの人が関心を寄せてきた。筆者も人名は無文字社会における貴重なテキストであり、かつメッセージであるという観点から、コンゴ（当時ザイール）東部に住むテンボ族の命名について考察を加えた（梶 1985a, 1985b, 1995, 2012 など）。

本稿は筆者が 2008 年から断続的に調査しているウガンダのニョロ族の命名についての考察である。ニョロ族はウガンダ西部に住むバンツー系の1族で、人口は約 667,000 である（Lewis, 2009）。人口数万の部族が多いアフリカにおいては大きな集団を構成している。ニョロ族は、かつてはウガンダ西部を中心に、現在のコンゴ、タンザニア、ルワンダの一部を含む強大な王国を形成していた。現在も王、王族そして王宮は存在し、王宮はホイマ県の県都ホイマ市にある。王族はビート・クランによって占められており、そのことは命名にも反映する。ニョロ族の生業は主として農業であるが、牛も彼らの価値観の大きな部分を占める。ただ近隣のアンコレ族やルワンダ族のように、牧畜民（Bahima あるいは Batusi）と農耕民（Bahutu あるいは Bairu）のような明確な区別はない。

[†]京都産業大学現代社会学部

筆者の主たる調査地はホイマ市であるが、調査地ホイマにおいて、現在まで約 1000 の名前を集めた。収集においては、人名は、まず第一に、無文字社会におけるテキストであるという観点から言語調査の折に開始し、その後、人名に特化して収集した。収集においては主インフォーマントからの聞き取りに加えて、小学校などの生徒リストなども参照した。またそれに付随する民族誌的データも現地において収集した。

2 ニョロ語の名前の種類

ニョロ語で「名前」は *i:bâra 5, amabâra 6* という¹。偶然だと思うが、「体のアザ」も同じく *i:bâra 5, amabâra 6* である。しかしニョロの人々は、このことを偶然だとは捉えていない。名前が個人を区別するように、アザも個人を区別するのである。少なくとも彼らはそう考えている。「命名する」はニョロ語では、*okurúka omwâ:na i:bâra* 「子供に名前を与える」と言う。

ニョロ語の人名には(1)のようなものがある。これらのうち、人が必ず持っているのは、(1a)の誕生名と(1d)の親称、そしてキリスト教徒の場合は(1b)のキリスト教名（あるいは洗礼名）、そしてイスラム教徒の場合は(1c)のイスラム名である。ニョロ族の多くはキリスト教徒であるが、少数イスラム教徒もいる。またいわゆる伝統的祖先霊崇拜を行っている者も少なからずいるが、少なくとも表面上は多くはキリスト教徒（あるいはイスラム教徒）である。(1e)の渾名は持っている人と持っていない人とがいる。(1f)の自分でつける渾名も、持っている人と持っていない人とがいるが、持っている人は少数である。なお自分でつける渾名は渾名のカテゴリーに入るため、正式なニョロ語表現はないが、強いて言えば、(1f)で示したように *i:bâra*

¹ 名詞の後の数字は名詞のクラス番号である。ニョロ語の名詞は 20 のクラスに分かれていて、それぞれに 1 から 20 までの番号がついている。概ね、1 と 2、そして 3 と 4 のように一方が名詞の単数形、そして他方がその複数形となっている。ただ名詞には単数形だけのもの、逆に複数形だけのものもある。またクラス 9,10 のように単複同形のものもある。なお 1a, 2a は、それぞれクラス 1 と 2 のサブクラスである。以下、表記はほぼ IPA 方式であるが、ny [n], c [ç], j [dʒ] である。また b は鼻音の後では [b]、それ以外では [β]、そして鼻音の後以外の [b] は bb で表記してある。

ly'o'kwe'rukî:rra 5, amabára g'o'kwe'rukî:rra 6 「自らに与える名前」となる。(1g) の双子に関する名前は、カテゴリーとしては誕生名に入るのであるが、一種独特なので、ここでは別項目として立てる。なお、双子に関する名前というのは、筆者がそうまとめて呼んでいるだけであり、具体的には双子に関する様々な名前の集合である。また、誕生名の中には、近年、英語を使うなど、非伝統的な名前も生じてきており、これも別項目として立てておいた。また項目としては立てていないが、国王の名前など特殊な名前も本稿では扱う。

(1) a. 誕生名

i:bára ly'o'buzâ:rwa 5, amabára g'o:buzâ:rwa 6

b. キリスト教名

i:bára ly'o'busômi 5, amabára g'o:busômi 6

c. イスラム名

i:bára ly'o'busirâ:mu 5, amabára g'o:busirâ:mu 6

d. 親称

empâ:ko 9,10

e. 渾名

i:bára ly'e'kirukî:rra 5, amabára g'e:birukî:rra 6

f. 自分でつける渾名

i:bára ly'o'kwe'rukî:rra 5, amabára g'o'kwe'rukî:rra 6

g. 双子に関する名前

i:bára ly'o'murô:ngo 5, amabára g'abarô:ngo 6

h. 近年の名前

i:bára lihyâ:ka 5, amabára gahyâ:ka 6

多くの方は自分の名を名乗る時、個人名である誕生名、キリスト教名（あるいはイスラム名）、親称の3つを用い、Kajura Samuel Amooti のように名乗るが、キリスト教的色合いの強い人の場合は、Samuel Kajura の様にキリスト教名を先に持ってきて、そのあと個人名をつけることも多い。その場合、ヨーロッパ式に合わせて、親称を省略する人も多い。

ニョロ語の様々な名前の中で、誕生名が最もバラエティに富んでいて、かつ数が多い。以下、この誕生名を中心に見ていく。

3 誕生名

伝統的には、そして現在でも、誕生名による子供の命名は、男の子の場合は生まれてから 4 日目に、そして女の子の場合は 3 日目に披露される。新生児は生存が危ぶまれる場合があり、男の子が 4 日目そして女の子が 3 日目というのは、それだけ女の子の方が生存が確実視されているからであろう。

最近では、子供は生まれて 1 か月以内に県事務所(district headquarter)の人口局係(population officer)に出生届(birth registration)を出さなければいけない。これを滞ると保健、教育などの行政サービスが受けられない。ただこれをやりだしたのは比較的最近で、60代の人でこれを出している人は誰もいない。その場合は教会の洗礼証明書(baptism certificate)が代わりに果たす。出生届に必要な名前は、個人の誕生名のみである。

無文字社会の人名は、多くが誰かに宛てたメッセージとなっている(図 1 参照)。メッセージには、メッセージの発信者と受信者がいる。この場合、メッセージの発信者とは子供の名前の命名者(これは後で見るようにニョロ族では子供の父親)であり、受信者とは、メッセージの発信者である命名者が一言言いたい相手である。

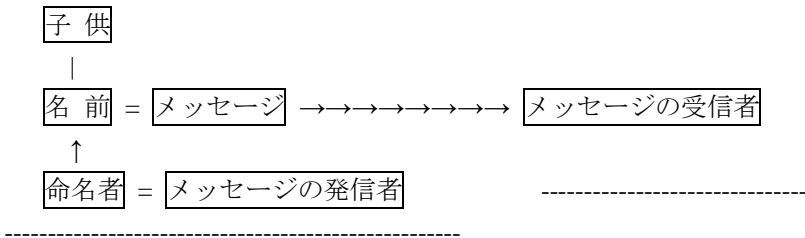


図 1: 名前は誰かに宛てたメッセージとなっている

以下の名前の分析は、一部、発信者からの情報も含まれているが、大部分は発信されたメッセージとしてのものである。これは実際にデータを集める時に、いちいち名前の命名者である子供の父親に聞いてまわることもできず、主として人々が知っている名前をあげてもらって、分析したからということもあるが、命名者は、なぜそういう名を付けたかを問われても言わないので、実際は問うこと自体意味がないのである。もっとも、メッセージの受信者はメッセージの発信者ともなりうるので、心情は1つということである。

発信されたメッセージと受信されたメッセージは基本的には同じであるはずである。しかし、名前は必ずしもすべて表現するわけではなく、多くは省略形である。とりわけ動詞形においては主語や目的語を省略する傾向がある。これは名前であるからあまり長いのは好まれないということもあるが、大きな理由は、命名者である父親がすべてを表現しないということがある。つまり、すべてを言わないわけであるから、聞いた方は推測しなければならない部分が多い。しかし、そこはニョロ語の名詞のクラスなど様々な言語的デバイスで、推測は成り立つのである。

3.1 具体例

紙面が限られているので少数しか挙げられないが、(3)以降に具体例を示す。例は数行にわたっている。まず、(a)の項目であるが、1行目に名前自体を示す。そのあとに、名前の男女別を MF で示す。M(*asculine*)が男性名で、F(*eminine*)が女性名である。その次の行は名前の形態素分割である。そしてその下に、それぞれの形態素の意味を英語で書いてある²。さらに形態素分析の下の行には、名前の意味を日本語で書いてある。なお、名前は名詞句や文の一部であることが多く、かつ名詞句の主要部名詞や文の主語名詞が省略されていることが多い。その場合は(b)で、名前に現れていない

² 形態素分析における略語は以下の通りである。Aug: augment「一種の冠詞」、NPr: nominal prefix「名詞類接頭辞」、SPr: subject prefix「主語接頭辞」、Appl: applicative「適用形」、Pass: passive「受身の接尾辞」、Fin: final「語尾」、Perf: perfective「完了接尾辞」、GenPres: general present「一般現在形」、PresHab: present habitual「現在習慣形」、NPst&ResulSta: Near past and Resulting state「近過去結果状態形」、Prog: progressive「進行形」、RemFut: remote future「遠未来形」、Subj: subjective「接続法」、Imp: imperative「命令形」、SubjRel: subject relative「主語関係節」。

ものを補った名詞句や文を示してある。さらに、その下に解説・補足説明を加えてある。

例(3)(4)(5)は隣人に宛てたメッセージ、(6)(7)は家族に宛てたもの、(8)(9)は子供誕生時の状況を記録したもの、その場合、神のおかげというものが多く、神へのメッセージと考えてもいいものである。例(10)(11)は、最近の名前である。ここでいう最近の名前とは、以下の(2)のようなものをいう。

- (2) a. 近年の時事的出来事に由来するもの
 b. 近年の技術や情報によってニョロ社会に知られるようになったもの
 c. 英語使用によるもの

(2a) の中には、「独立」や「指令官」など、旧聞に属するものもあるが、伝統的範疇に属さないでここに属する。多いのは(2c) の英単語使用のものである。本来ならばニョロ語を使えばいいと思うのだが、敢えて英語を用いるというものも多い。すべて、カテゴリーとしては誕生名である。

なお、キリスト教に由来する *asú:mwê* 「(神は) 感謝されるべきだ」とか *birú:ngî* 「いいこと」なども、伝統的名前とは言いがたいが、しかしこれらはすでにしっかりとニョロ社会に根を下ろしているため、このカテゴリーには入れていない。

- (3) a. *barú:ngî ndóhò* M
ba-rungi *n-do ho*
 they(cl.2)-good I-am there
 私がいる時は彼らはいい人だ
- b. *Barú:ngî ndóhò, báitu ntárohò bambaza kúbí.*
 彼らは私がいる時はいい人だが、私がいなくて私のことを悪く言う。
 [解説] 近所に、一緒にいると愛想がいいのだが、私のいないところでは陰口をたたく人がいる。その人に一言メッセージを発する。

- (4) a. *banturá kí?* M

[解説] 酒や麻薬におぼれて滅んだ家族がある。子供たちに気をつけろと言う。

(8) a. así:mwê MF

a-si:m-w-e

he(cl.1)-thank-Pass-Fin [Subj]

彼は感謝されるべきだ

b. Mukáma así:mwê.

主は感謝されなければならない。

[解説] これは母親が妊娠中、体が弱くて、とても子供を無事産めそうになかったのだが、無事生まれてきたということで神に感謝する名前である。あるいは戦争などで社会が混乱していて無事産めるかわからなかったという場合もありうる。ここでクラス 1 の動詞主語接頭辞「彼」が意味するのは、Mukáma「主」あるいは Ruhá:ngá「神」である。ただ名詞としては表現されていない。

(9) a. atugó:nzâ MF

a-tu-gonz-a

he(cl.1)-us-like-Fin [PresHab]

彼は我々を愛している

b. Mukáma atugó:nzâ.

主は我々を愛している。

[解説] 神がわれわれに願いを叶えてくれた。例えば、女の子ばかりの後に望んでいた男の子が生まれた場合、あるいは逆に男の子ばかりだったのが、ついに女の子が生まれたなど。

(10) a. k'o:mwirwâ:ro MF

ka: o-mu-i-rwarro

of(12) Aug(18)-NPr(18)-NPr(5)-hospital

病院からのもの

b. Aká:na kánu kakaza:rirwa omwirwâ:ro.

この子は病院で生まれた。

[解説] 病院で生まれた子。特に帝王切開したなど特殊な場合につくことが多い。

(11) a. joy F

喜び

b. Nyina joy kuzára akaisíkí kânu.

私はこの娘ができて嬉しい。

[解説] 本来なら Nsemerirwe kuzára akaisíkí kânu. 「私はこの娘ができて嬉しい。」となるところだが joy 「喜び」という英語を使っている。

3.2 命名権

ニョロ族によれば、名前はかつては祖父がつけたと言うが、今は父親がつける。命名は家長としての父親の義務であり特権でもある。母親には言う権利はない。また祖父母にも権利はない。しかし、父親が遠くにいて連絡がつかない場合は、母親や祖父母が仮の名前をつけておく場合がある。ただし、たとえ夫が遠くにいても連絡がつく場合は、夫が電話などで名前を知らせてくる。

母親や祖父母がつける名前が、なぜ仮の名前かという点、今述べたように、命名権は子供の父親に属し、たとえ祖父であっても正式に命名することとは父親の権利を否定することになるからである。当座の名前であるから差しさわりのない名前、特に (12) のように、とりあえず生まれた日を名前にしておくというものが多い。なお「日曜日」にはニョロ語には、幾つかの言い方があるが、sabbî:ti は男性名、sá:ndê は女性名となるのが普通である。英語をそのまま使い sunday とすると、これは男女共用である。

- | | | | | | | | |
|---------|----------|----|--------|----|--------|----|------------|
| (12) 1. | sabbî:ti | M, | sá:ndê | F, | sunday | MF | 日曜日に生まれた子供 |
| 2. | monday | MF | | | | | 月曜日に生まれた子供 |
| 3. | friday | F | | | | | 金曜日に生まれた子供 |
| 4. | mugîsa | M | | | | | 幸運 |

しかしながら、稀に母親がつける名前が正式なものになる場合がある。それは次の 3 つの場合である。

- (13) a. 夫婦間の仲がよく夫が妻に命名権を委ねる場合
 b. 夫の死後、子供が生まれた場合
 c. 妻が夫を説得して妻が考えた名前をつける場合

妻が名前をつける場合、とりわけ夫婦間の仲がよい場合は、優しい名前をつける傾向がある。具体的には、(14)のような名である。このような名前は、もちろん男性がつける場合もあるが、一般に男性は(3)(4)(5)で見たようなメッセージ性の強いドギツイ名前をつける傾向があり、妻がつける名前は、それとは大きな対比をなす。

- (14) a. birú:ngí MF 良いこと
 b. kisê:mbo MF 贈り物
 c. así:mwê MF 彼は感謝されるべきだ
 d. mugîsa M 幸運

夫が死んだため妻がつける名前には(15) (16) (17)のようなものがある。

- (15) a. kasangá kî? M
 ka-sang-a ki
 it(cl.12)-find-Fin what [GenPres]
 それは何を見るか
 b. Kánu akâ:na kasangá kî?
 この子は何を見るか。
 [解説] 生まれてきても父親はいない。女性名は nsangiré kî? 「私は何を見たか」となる。
- (16) a. musangiré kî? MF
 mu-sang-ire ki
 you(pl)-find-Perf what
 あなた方は何をそこに見たか
 [解説] 父親や祖父母など親族の死んだあと生まれた子供。生まれた時誰もいなかった。

(17) a. ndagâ:no F

n-daga:no

Npr(cl.9)-promise

約束

b. Endagá:no ecwekére.

約束は破られた。

[解説] 父親の死後、母親がつける。結婚式の時、教会で共に生きようと誓い合ったのに、あなたは往ってしまった。

また妻が夫を説得して妻がつける名前には、例えば(18)(19)(20)のようなものがある。このような場合、妻が夫に対して不満を抱いていたり、怒っていたりすることが多い。そしてその名は多くは娘の名になる。「娘よ、こんな男にひっかかるなよ」という助言である。妻が名前をつけることは普通はないが、夫としては、もうそんなことで言い合いをするのも嫌なので、「じゃあ、いいよ」ということで妻と折り合いをつけるのである。

(18) a. nyangiré kî ? <nyangi:ré kî ? F

n-ang-ir-ire ki

I-refuse-Appl-Perf what [NPst&ResultStat]

何のために私は拒否したのだろうか

b. Nyangi:ré kî kuswê:rwa omusáija ô:nu ?

何のために私はあの男と結婚するのを拒否したのだろうか。

[解説] 今の夫と付き合っただけで結婚し子供ができたが、なぜ、あの時あの男と結婚しなかったのだろうか。あっちの方がずっとよかった。自分の夫の前に付き合っていた男性の方がずっとよかったと後悔する名前。

(19) a. tigulyê:ra F

ti-gu-li-er-a

not-it(cl.3)-RemFut-be.clear-Fin [RemFut]

それは晴れることはない

b. Omutíma tigulyê:ra.

心は晴れることはない。

[解説] この子の母親が夫に怒っている。私はあの仕打ちを忘れない。夫が他の女との間に子供をつくったという場合もある。女の子につく名前なので、自分の娘にこんな男にひっかからないように気をつけろというメッセージになっている。

(20) a. *tibasí:má* M

tí-ba-si:m-a

not-they(cl.2)-thank-Fin [GenPres]

彼らは感謝しない

b. *Abasáíja tibasi:ma ebi abakázi bakóra.*

男たちは妻に感謝しない。

[解説] この子の母親は夫に怒っている。私がいろいろしてあげても夫は感謝 1 つしない。自分の息子にこんな男にならないようにというメッセージになっている。

(21) a. *mbâju* F

肋骨

b. *Omwá:na ó:nu mbâju zâ:nge.*

この子は私の肋骨だ。

[解説] この子は私が産んだのだ。私の他に夫には女はいない。聖書に、女性は男性の肋骨から生まれたと書いてあるが、それをもじった。

たまに夫の考えと妻の考えが鋭く対立することがある。そういう場合、しばらくは 2 つの名前が同時に用いられるという状態が続く。しかし最後に勝利するのは夫である。子供たちは父親の側に立って、父親がつけた名前前でその子供を呼ぶ。妻としては、最後には諦めざるをえない。ニョロ族の男性は、すべては時間が解決すると言う。

誕生名は、一般に命名者である父親の心情を述べたものが多い。妻に対する非難になっている場合も多い。しかし妻としては耐えるしかないのである。むしろ、そういう名前をつけられないように振る舞うべきなのだ。妻としては、自分を非難する名前がついた場合、友人に子供の名前どうな

ったのと聞かれた場合は、親称 (6 節参照) を用いて Akiki などと言って繕うことも多い。子供は大きくなれば自分の名前の意味がわかってくるが、なぜそういった名前をつけたかは問わないことになっている。問うのはタブーである。名前は子供とは関係ないのである。ただし、最近では、変な名前をつけると、すでに成長した子供が父親の元にやってきて、こんな名前変だし古臭いので変えろと言うこともある。

3.3 名前の具体性と抽象性

名前は子供誕生の状況に対応したメッセージであるとするれば、その内容は無限にありうる。しかしながら、それが言語表現である限り、個々の内実は異なっても、表現としては収斂していく。例えば *baléké* であるが、これは「彼らを放っておけ」という意味であり、表現 *baléké babázê, balijwá:hâ* 「彼らに勝手に言わせておけ。そのうち疲れるだろう。」から取ったものだ。しかし、なぜ放っておけと言っているのかは、個々の場合に依じて異なる。最もありそうなのは、「あれはあの人の子ではないのではないか」という人の噂であるが、その他、中傷、噂は無限にある。しかし名前としては、*baléké* 「彼らを放っておけ」に収斂する。同じ意味であるが、人によっては、*babázê* 「彼らに言わせておけ」を名前にもすることもある。さらには、*balijwá:hâ* 「彼らはそのうち疲れるだろう。」の部分を取る人もいる。すべて発想は同じである。

3.4 よくある名前と稀な名前

名前にはよく出くわすものもあれば、1 人のみ、あるいは極めて稀にしか出くわさないものもある。よくある名前には(22)のようなものが³、逆に稀な名前には(23)のようなものがある⁴。

(22) a.	<i>birú:ngî</i>	MF	良いこと
	b. <i>mugísa</i>	M	幸運
	c. <i>mbabâzi</i>	M	慈悲

³ (22f-h)は英語を用いた新しい名前である。

⁴ (23a-b)は 3.6 節で述べる邪術を避ける名前である。

- d. atuháírwe MF 彼（女）は我々に与えられた
 e. byaruhánga M 神のもの
 f. lucky M 幸運
 g. star MF 星
 h. joy F 喜び
 (23) a. bisó:dô M ニワトリのフン
 b. kakubébe M 小さな白蟻
 c. binyômo M 蟻たち
 d. bikanculika M それらは私を上下逆にした

3.5 男の子の名前と女の子の名前

男の子の名前と女の子の名前と比べると、男の子の名前の方が種類が多いことに気付く。それは男性は結婚しても村に留まるに対して、女性は結婚すると村から出て行くからである。名前が誰かに当てたメッセージだとすると、そのメッセージはずっと留まっておくのが望ましい。メッセージの相手は、多くの場合、その村にいるからである。女性は結婚すると村から出て行くため、拡散性に対しては有効だが、このメッセージ性は弱くなる。かつては、女性が結婚して家から出ると、そのベッドは壊して燃やしていた。

3.6 邪術を避ける名前

ニョロ社会は邪術横行社会である。今日でも呪いによる殺人（毒殺を含む）がしばしば問題になる。(24)のようなことが言われている。

(24) Ow'olya nâwê núwé akwîta.

あなたと一緒にご飯を食べている人があなたを殺すのである。

「あなたと一緒にご飯を食べている人」というのは、家族の者や親密な関係にある人ということである。しかし、そういう人が「あなたを殺すのである」。コンゴのテンボ族では「近しい人こそが敵である。」というが、

同じことである。しかし(24)で重要なことは、一緒に食べているからこそ、ちょっとした隙に毒をもることが可能だということである。

邪術をかけられる大きな理由は、人に妬みを買うことである。妬みの原因は、お金、財産、子供の多寡など様々である。妬みを避ける方法はいくつもあるが、その 1 つが名前である。つまり人に注目されないような名前をつけるのである。例えば「ニワトリのフン」である。「アッ、“きれいな子”が来た。」と言え、みんなそちらを向くが、「アッ、“ニワトリのフン”が来た。」と言え、誰もそちらを向こうともしない。このように、人の注目を避ける名前は、伝統的には多い。例えば、(25)(26)のようなものである。しかしながら、キリスト教は邪術を禁止しており、近年ではこのような名前を子供につける親は、もはやほとんどいなくなった。

- (25) a. bisó:dô M ニワトリのフン
 b. kajôka M 小さな蛇
 c. bitanâki M 吐瀉物
 d. kâbwâ M 子犬
- (26) a. bigôgo F 乾いたバナナの幹の繊維
 b. kasohêra F 小さな蠅
 c. bitê:ngo F 使い古した布
 d. bihógô F 腐ったキャッサバ

3.7 名前の継承

誕生名は父親が子供に個別につけるのが通常だが、長男、長女は、それぞれ父方の曾祖父、曾祖母の誕生名を引き継ぐ(図 2 参照)。ただし女の子の場合は男の子の場合ほど厳格ではない。

余談だが、この命名法は、妻への説明に利用されることがある。例えば kabéiho MF 「偽り」という名前であるが、これは、夫が、妻が不倫をしてできた子だと疑っている名前である。夫はなぜそういう名前をつけたかは説明しないが、妻にはわかる。そして夫に詰問する場合がある。そういう場合、夫は、これは私の祖母の名前だから、と言って誤魔化すのである。

a. 長男の例

Δ nyandú:rû
 |
 Δ kisôro
 |
 Δ kakubébê
 |
 Δ nyandú:rû
 |
 Δ kisôro
 |
 Δ kakubébê
 |
 Δ nyandú:rû

b. 長女の場合

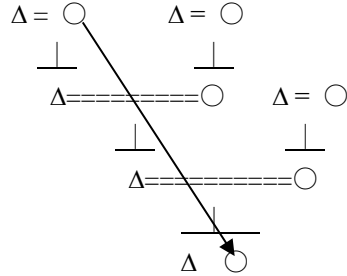


図 2: 名前の継承

3.8 双子につける名前

双子はニョロ語では omurôngo 1, abarôngo 2 と言う。双子の名前というものは、誕生名の一種である。しかしこれを別仕立てで述べるのは、他の名前とは異なる著しい特徴があるためである。最も特徴的なことは、双子は生まれる前から名前が決まっていることである。誕生名は一般に子供が生まれた時点での父親の一番の関心事が現れるのであるが、あらゆる状況を凌駕して（あるいは無視して）双子の名前が決まっているということは、双子の誕生が如何に大きなインパクトを家族に与えるかを示している。しかも名前は双子のみならず、双子の後に生まれる子供にもその後 4 代にわたって既に決まっているのである。これらの命名は、1 つの核家族の中だけではなく、リネージ（拡大家族）全体を勘案して行われる。なお、名前の後の（ ）の中に示したものは 6 節で示した親称である。これも前もって決まっている。

表 1 : 双子とその後に生まれた子供に付く名前

	男の子	女の子
双子のうち最初に生まれた子供:	isingôma (amô:ti)	nyangómâ (amô:ti)
双子のうち 2 番目に生まれた子供:	kátô (adyê:ri)	nyakátô (adyê:ri)
双子の後に生まれた子供:	kí:zâ (amô:ti)	kí:zâ (amô:ti)
その後に生まれた子供:	ká:hwâ (atê:nyi)	ká:hwâ (atê:nyi)
その後に生まれた子供:	irú:mbâ (atênyi/abwô:ki)	nsú:ngwâ (adyê:ri)
その後に生まれた子供:	barô:ngo (amô:ti)	nyamáizi/nyamahú:ngê (adyê:ri)

双子は特殊な存在であるため、その両親もそれぞれ *ise barô:ngo* (あるいは *is'abarô:ngo*) 「双子の父親」、*nyina barô:ngo* (あるいは *nyin'abarô:ngo*) 「双子の母親」というタイトルが付き、人々に一目置かれる存在になる。

双子は生まれると、その翌日に教会に連れて行き、洗礼を受けさせる。これは普通ではない。双子でない場合は、洗礼は通常生後 1 ヶ月である。洗礼は通常教会で行われるが、誕生翌日であるため、場合によっては教会に行けないこともある。その場合は神父が家や病院に来て洗礼の儀式を行う。これを *okuyô:ra amahâsa* 「双子儀礼を掬う」という。

そして誕生から 2 週間以内に双子の父親は、義理の父 (妻の父親) に双子を連れて訪問する。これをニョロ語で *okutá:hya abarô:ngo* 「双子を家に入れる」と言う。義理の父は食事で義理の息子をもてなし、プレゼントを与える。昔はこの場で、儀礼的にお互い卑猥な言葉を掛け合ったというが、今は行われない。その日は通常家に帰るが、泊まってもよい。そして、さらにその後 2 週間以内に、義理の父は義理の息子に返礼の訪問をする。義

理の息子は山羊を絞め、バナナの酒などで義理の父をもてなす。この場には近所の人をも駆けつける。こうした儀礼は *okumára amahâsa* 「双子儀礼を終える」という。

なお、名前の語源であるが、双子のうち最初に生まれた子供の *isingôma* (男の子の場合) に含まれる *ngôma* は *engôma* 9,10 「太鼓」と同じ語幹 *-gôma* を有する。しかし女の子の場合の *ngómâ* は子音・母音は同じでも、*engôma* 9,10 「太鼓」とは声調が異なる。

3.9 異常な状態で生まれてきた子

分娩は時に異常さを伴うことがある。とりわけ、逆子の場合がそうである。それ以外にも、臍の緒が首に巻き付いて生まれてきたり、生まれてしばらくすると歯が生えてくるが、歯が、通常の上歯からではなく下歯から先に生えてくる場合がある。こういった場合、ニョロ族は双子が生まれてきた場合と同様、通常ではないと考え、儀礼を行い、異常性を鎮めようとする。ただ、首に臍の緒が巻き付いて生まれてくることは、それ程異常とは思われず、対応する儀礼はない。以下、逆子の場合と下歯から先に生えてきた場合について述べる。いずれの場合も名前は、双子が生まれた時のように、男の子の場合は *isingôma*、そして女の子の場合は *nyangómâ* とつける。まず、逆子の場合について述べる

逆子は生まれるとすぐに、*isingôma* (男の子)、*nyangómâ* (女の子) と名付けられる。しかしこれは一時的な名前で、以下の儀礼を済ますと、通常の誕生名がつけられる。すなわち、逆子が生まれるとすぐにカゴ (*ekî:bo* 7, *ebî:bo* 8) を 1 個用意し、そのカゴの底を切り取る。そして子供を頭からそのカゴの中を通すのである。これを行うことによって頭から生まれてきたことを示すわけである。カゴは通常、パピルスの繊維で編んだものを用いるが、それが手元になく金属製の金盥などだと底が抜けないため、この儀礼を行うことができない。そうすると、子供はその儀礼が行われるまで *isingôma* (男の子)、*nyangómâ* (女の子) と呼ばれる。この儀礼を終えないと、通常の名前は与えられないのである。

次に、下歯が先に生えてきた場合であるが、赤ちゃんに歯が生えてくるのは生後 2、3 ヶ月経ってからなので、その時点ではすでに名前は与えられ

ている。しかし、下歯が先に生えてきたのがわかると、すぐさま *isingôma* (男の子)、*nyangómâ* (女の子) と名前が変えられる。そして双子の場合と同様の儀礼が行われる。すなわち、子供の父親が、子供を連れて義理の父(妻の父親)を訪問する。そして義理の父は飲食で義理の息子をもてなす。そしてその後、今度は義理の父が義理の息子に返礼の訪問をする。ここでも義理の息子は義理の父をもてなす。これを終えて始めて名前を *isingôma* (男の子)、*nyangómâ* (女の子) から元の名前に戻すのである。

4 キリスト教名

ニョロ人の多くはキリスト教徒である。もちろん表面上だけのこともあるが、極めて信心深い人も多い。通常、村には教会があり同時に学校を営んでいるため、就学児童はいやおうなしにキリスト教に触れる。

しかし多くは、自らの意識なしにキリスト教徒となる。と言うのも、子供は生後約 1 ヶ月で洗礼を受けるからである。生後約 1 ヶ月で、両親は洗礼のため子供を教会に連れて行く。その時に洗礼名としてキリスト教名が正式に決まるのであるが、父親は、前もって考えておかなければならない。洗礼式で、神父が子供を両親から取り洗礼の儀式を行うが、その時、洗礼名を何するか聞かれるからである。

洗礼名は万国共通で、ニョロ族に特徴的なことはない。以下、幾つかよく見かける名前を挙げておく。なお女性名の *Sâra* はイスラム教徒も用いる名前である。

- | (27) 男性名 | 女性名 |
|----------------|--------------|
| 1. John | 1. Susan |
| 2. Samuel | 2. Sharon |
| 3. Christopher | 3. Sandra |
| 4. Robert | 4. Elizabeth |
| 5. Steven | 5. Betty |
| 6. George | 6. Sofi |
| 7. Norman | 7. Samantha |

- | | |
|-----------|---------------|
| 8. Peter | 8. Serena |
| 9. James | 9. Rebecca |
| 10. Paul | 10. Charlotte |
| 11. Amos | 11. Lilian |
| 12. Denis | 12. Sâ:ra |

5 イスラム名

イスラム名というのはイスラム教徒がつける名前で、誕生時に両親がつける。従ってイスラム教徒は誕生時に、イスラム名、誕生名、親称の3つの名前を持つことになる。名前は通常、この順番で書かれる。

以下(28)に、幾つかよく付けられる名前を挙げておく。ここで示したのはニョロ語的発音によるものであり、正式にはスペルは多少違うし、またアクセントマークや、母音の長音記号はつけない。Ibrahîmと Môm:zes はキリスト教名でもある。

- | | |
|-------------|--------------|
| (28) 男性名 | 女性名 |
| 1. Ibrahîm | 1. Sharî:m |
| 2. Môm:zes | 2. Sâ:ra |
| 3. Shafwî:k | 3. Shamîlâ |
| 4. Íddî | 4. Jánét |
| 5. Hakî:m | 5. Shamî:m |
| 6. Harû:na | 6. Shadî:a |
| 7. Adrî:si | 7. Madî:na |
| 8. Farû:k | 8. Masitû:ra |
| 9. Âbdu | 9. Maimû:na |
| 10. Amî:si | 10. Safî:na |
| 11. Karî:m | 11. Héwâ |
| 12. Abdárâ | 12. Madî:na |

6 親称

ニヨロ族には empâ:ko 9,10「親称」と呼ばれるものがある。これはニヨロ族とその南に住むトーロ族にのみ見られるもので、相手に対して尊敬と親愛性を示すものである。ただ数は限られていて全部で 12 しかない。そのうち okâ:li は王にのみ付与されるものである。なお bbâlâ (あるいは abbâlâ) は、トーロ族のみが用いニヨロ族は用いない。多くは男女共用であるが、男性にのみ用いるものもある。

- (29) 1. akî:ki MF
 2. amô:ti MF
 3. abbô:ki MF
 4. abwô:li MF
 5. adyê:ri MF
 6. atê:nyi MF
 7. atwô:ki MF
 8. arâ:li M
 9. acâ:li M
 10. apû:li M
 11. bbâlâ (あるいは abbâlâ) M
 12. okâ:li M (王のみが用いる)

親称は文化的に重要なものである。例えば、挨拶においてこれは欠かせない。もし相手に対して親称を用いなければ、挨拶は極めてぶしつけなものになる。例えば、朝の挨拶は(30)のようである。

- (30) A: Oraire ótâ, Akî:ki? : おはよう⁵、アキーキ。
 B: Ndaire kurú:ngî, Amô:ti. : おはよう、アモーティ。

⁵ Oraire ótâ? と Ndaire kurú:ngî. は字義通りには、それぞれ「あなたはどの様に夜を過ごしましたか。」「私はうまく過ごしました。」という意味である。

- Î:we, oraire ó:tâ ? : あなたは、いかがですか。
 A: Ndaire kurú:ngî. : 私はいいです。

この親称は、ニョロ族のすぐ北に住むルオ系諸族の言語が起源である可能性が高い(例えば Isingoma 2014 参照)。しかし奇妙なことに、ルオ系諸族は親称を用いないのである。ここで親称と呼んでいるものは、英語で *pet name* と言われることが多いが、Isingoma (2014)は英語の用語として *praise name* を提唱している。親称については Isingoma (2014)のみならず Byakutaaga (1991)なども書いているが、これらの著者はトーロ族の人間であると思われる。と言うのも、彼らは *bbálâ* (あるいは *abbálâ*) の名を挙げているが、上にも書いたように、この名はトーロ族のみが用いニョロ族は用いないのであるが⁶、彼らはそのことについて触れていない⁷。

7 渾名

渾名は、当人の体の特徴や性格、職業などを引き合いに、他人によって与えられるものである。例えば、木こりはニョロ語では *omubáizi 1, ababáizi 2* と言うが、いつも斧や鋸などを持ち歩いているような人は *kabáizi 1a, 2a* のような渾名がつく。

- (31) *karô:le* M のっぽ
 [解説] *karô:le* というのはアフリカ・ハゲコウのことである。この鳥は大きく地面を人の様に歩く。
- (32) *kanywa mwé:ngê* M 呑み助
ka-nyw-a *mwenge*
 Npr(cl.12)-drink-Fin liquor [GenPres]
- (33) *kálí rugâ:mbo* F 噂を言いふらす人

⁶ ただし、ニョロ族でも誕生名としては用いられる可能性はある。

⁷ トーロ族とニョロ族は言語・文化的に極めて近い関係にあるので、トーロ族の人間は安易に、トーロ族にあるものはニョロ族にもあるし、トーロ族にないものはニョロ族にもないと考えがちである。

- ka-li rugambo
 which(cl.12)-is rumor
- (34) bigûru M 体を洗わない人。特に足の汚い人。
 bi-guru
 NPr(cl.8)-foot
- (35) kabáizi M 木こり、いつも斧を持ち運んでいる人
 ka-baizi
 NPr(cl.12)-wood.worker

8 自分でつける渾名

渾名は通常他人がつけるものであるが、ニョロ族は自分でこれをつける場合がある。それらは多くは自我意識の高いものである。

- (36) 1. kanyú:ngû M どこに行くにもパイプを離さない人
 cf. enyú:ngû 9,10 「パイプ」
2. honda [hó:ndá] M ホンダの車のように早く走る人
3. rolex M ローレックス。ローレックスの時計のように
 価値のある人
4. computer [kompjútâ] M コンピューター。コンピューターのよ
 うに多くの問題を一度に解く頭のいい人間
5. ntwî:ga F シマウマのように首の細く美しい女性
 cf. entwî:ga 9,10 「シマウマ」
6. brown F 肌の色が褐色の人。黒くなく褐色であることを
 誇っている

9 家族名

ニョロ族は本来、家族名を持たない。しかしながら近年、父親の個人名である誕生名を家族名のように用いる者が現れてきている。例えば Norman Kugô:nza という男性であるが、彼は父親の名前を取って Norman

Kajûra と名乗っている。Kajûra は父親の誕生名である。彼は生まれ育った故郷を遠く離れて住んでいるため、彼の同僚は誰も彼の本来の誕生名を知らない。実際、そこでは彼の誕生名は最早ほとんど意味をなさない。そして彼の子供たちも Kajûra をあたかも家族名のように用いている。一般に父親の誕生名を家族名のように用いる場合は、その家族が裕福な場合である。父親がここまで自分たち家族を育ててくれたということに感謝し、それを記録しているのである。

10 ビート・クラン名

ニョロ族は多くのクランから構成されているが、王族はすべてビート・クランのメンバー (omubî:to 1, ababî:to 2) からなっている⁸。そして彼らの個人名は他と違った特徴を持つ。王の名前もビートタイプの名前である。

特徴としては、まず、その多くが母音 o- で始まるということがある。ニョロ族の北にはアチョリ族などルオ系の民族が住んでいるが、彼らの名前の多くも o- で始まる。従って、これらの名前はルオ系言語由来という可能性が高いが、この研究は今後の課題である。ニョロ語では omukîdi 1, abakîdi 2 という語がアチョリ族やランギ族などルオ系民族を指す語として用いられるが、その語幹 -kîdi は okîdi と rukîdi の語幹と共通している。ただしすべてがそうであるわけではなく、通常のニョロ語で分析できるものも多い。なお、óyô と ocólâ も掲げてあるが、これらはトーロ族しか用いない。

- | | | |
|---------|--------|---|
| (37) 1. | olîmi | M |
| 2. | ocâki | M |
| 3. | óbbô | M |
| 4. | okîdi | M |
| 5. | mukîdi | M |
| 6. | rukîdi | M |
| 7. | owínyî | M |

⁸ ビート・クランは南隣のトーロ族でも王族クランである。

8. wínyî M
 9. kimô:mi M
 10. igûru M
 11. munióngô M
 12. óyô M (トーロ族のみ)
 13. ocólá M (トーロ族のみ)

ビート族でも女性の名前は他のニョロ族の名前同様の分析が可能である。

- (38) 1. ka:batályâ F 食べない人のもの
 2. k'o:mubígô F 塀の中のもの
 3. k'entále F ライオンのもの
 4. ka:bakû:mba F 行進者のもの

11 王のタイトルと名前

11.1 王のタイトル

ニョロ族の王は omukâma 1, abakâma 2 という。王は(39)から(47)に示したような称号を持つ。称号はどの王にも用いられるものもあれば、特定の王に固定化したものもある。(47)は(39)と(46)が組み合わさったもので、その後には Omukâma wa Bunyôro 「ニョロ国の王」と続いている。

- (39) rukira abasáija
 ru-kir-a abasaija
 it(cl.11)-exceed-Fin men [GenPres]
 それは (すべての) 男を凌ぐ
- (40) entále ya buyôro
 lion of bunyoro
 ニョロ国のライオン
- (41) cwâ

cw-a

break-Fin [Imp]

壊せ

[解説] 王はすべての問題を解決する。この称号は現王の祖父王にのみ用いられる。

- (42) múlyá-amagúfa, nigakunkumúkâ

mulya-amagufa ni-ga-kunkumuk-a

eater-bones Prog-they(cl.6)-fall-Fin

骨を散らしながら食べる者

[解説] 人々は問題にぶつかった時、解決策を求め王の所に行く。そして王は問題を解決する。その様を、骨を散らしながら食べる者と形容する。

- (43) maguru nyô:ndo

maguru nyô:ndo

leg(cl.6) hammer

金槌足

- (44) rutabí:ngwa

ru-ta-bing-w-a

it(cl.11)-not-chase.away-Pass-Fin [GenPres/SubRel]

追い払えない者

- (45) mutabí:ngwa

mu-ta-bing-w-a

NPr(cl.1)-not-chase.away-Pass-Fin

追い払えない者

- (46) agutá:mbâ⁹

a-gu-tamb-a

he(cl.1)-it(cl.3)¹⁰-cure-Fin [GenPres]

彼はそれを治す

⁹ これは王の個人名になることもある。

¹⁰ Opr の -gu- (cl.3)が何を指すかは不明瞭である。omútwé「頭」あるいは omugô:ngo「背中」か。

(47) rukira-basáija, agutá:mbá, omukáma wa bunyôro

(48) は王を崇める際のフレーズの例である。

(48) Hangiríza Agutá:mbâ, Entále ya Buyôro !

ニヨロ王国のライオンである王よ、長寿あれ。

11.2 王の名前

王は称号とは別に個人名を持っている。王の個人名はビートタイプではない通常のニヨロ語タイプである。以下に 3 例示す。

(49) a. gafa: bûsa M

ga-fu-a busa

they(cl.7)-die-Fin nothing [GenPres]

それらは無駄になる

b. amâ:ni gafa: bûsa.

力は無駄になる。

[解説] 現国王の名前。国王は男性だが、通常の名前としてはこの名は女性にもつく。意味は、この子の前に子供を産んだが、役立たずであり、産んだだけ無駄だった、ということ。

(50) a. k'a:balê:ga M

ka: a-ba-le:g-a

of(cl.12) Aug-they- stretch-Fin [GenPres/SubRel]

(弓を) 張る人たちの

b. aká:na kánu k'a:balê:ga.

この子は (弓を) 張る人たちのものだ。

[解説] 現国王の祖父の名前。当時はニヨロ王国は非常に広大であった。

(51) a. agutá:mbâ M

彼はそれを治す

この名は国王の称号にもなる。注 9 参照。

(52) は3代にわたる王が普段どの様と呼ばれているかを示したものである。Igûru は誕生名、Títô はキリスト教名 Titus、そして Cwâ は王名である。

- (52) 1. Solomon Gafa: bûsa Igûru 現王の名前
 2. Sir Títô Wínyî 先代王 (現王の父親) の名前
 3. Cwá K'a:balê:ga 先先代王 (現王の祖父) の名前

12 終わりに

一般に無文字社会では、記録する文字がないため、いわゆる文化の伝承に困難が付きまとう。そのため様々な代用手段が考案されてきたが (梶 2012 など参照)、筆者は人名もそのために用いられているとみる。もちろん、人名は個人を他の個人から区別するのをその第一義とするが、アフリカの多くの伝統的社会では、命名者自身、あるいは社会が意識していようがいまいが、結果として人名が文字の役割を果たしている。

我々は文字と言うと、紙につけたインクのシミをイメージするが、もし機能を考慮に入れると、人名も文字の役割を果たしていると考えなければならない。文字の役割とは、話し言葉の持つ時間的制限と空間的制限を打ち破ることである。話し言葉には、まず、言ったとたんに消え去り、空気中に留まっていないという時間的制限がある。また、近くの人には聞こえるが遠くの人には聞こえないという空間的制限がある。しかし文字に残せば、後から来た人もわかるし、また遠くの人にも伝達可能である。

ところで、メッセージを子供の名前に刻んだらどうなるであろうか。その子供はあと数 10 年生きるわけであるから、メッセージは数 10 年間保存される。すなわち、話し言葉の持つ時間的制限を打ち破る。そして子供は小さいうちは近所をウロチョロするだけであるが、長ずれば何 10 キロと移動する。つまり、名前メッセージは、話し言葉の持つ空間的制限をも打ち破るのである。その際、子供が記録媒体となっていることに注意しよう。子供が記録媒体としての、いわば紙であり、名前がペンによって刻まれたメッセージである。子供があとどれだけ生きるかということは、その

メッセージがどれだけ保持されるかということにつながる。熱帯アフリカという自然環境の厳しいところでは、記録媒体として紙より人間の方がより永続性があると社会は判断したのではないだろうか。

ニョロ族に限らず、一般にアフリカ人の個人名は数が多い。それは人間の経験というは無限にあるからである。しかしながら、すでに 3.3 節で述べたように、ニョロ族の名前を多数見ていくと、個人の経験としては無限であっても、表現としては収斂していくことがわかる。

なお、名前の言語表現としての特徴も本来述べるべきであろうが、ここでは省略せざるをえない。しかし、それは実例を見てわかる通り、名詞、名詞句、形容詞、動詞形（通常形、否定形、疑問形、命令形、関係節など）など多様である。

この点に関して 1 点注意すべきは、本稿では、名前を、キリスト教名とイスラム名、そして個人名と特定できるもの以外、すべて小文字で表記したことである。これは、ニョロ語においては、人名は本来固有名詞ではなく、普通の言語表現であるからである。しかしこの問題についても、本稿で述べる余裕はなく、別の機会に譲らなければならない（固有名詞の問題については梶 (1985b) で少し触れた）。

【参考文献】

- Byakutaaga, Shirley Cathy (1991) 'Empaako: An agent of social harmony in Runyoro/Rutooro'. *Afrikanistische Arbeitspapiere* 26: 127-140.
- Isingoma, Bebwa (2014) 'Empaako "praise names": An historical, sociolinguistic, and pragmatic analysis'. *African Study Monographs* 35(2): 85-98.
- 梶 茂樹 (1985a) 「テンボ族における個人名—言語人類学的考察—」『季刊人類学』16(1): 47-88. 講談社.
- 梶 茂樹 (1985b) 「テンボ族の人名の言語学的特徴」『季刊人類学』16(2): 72-120. 講談社.
- Kaji, Shigeki (1995) 'Le nom personnel chez les Batembo: Analyse ethnolinguistique'. *Bulletin des Séances* 41(3): 345-362. Académie Royale des Sciences d'Outre-Mer.

梶 茂樹 (2012)「アフリカ人のコミュニケーション—音・人・ビジュアル—」
『言語研究』 142: 1-28.

Lewis, M. Paul (ed.) (2009) *Ethnologue: Languages of the world*, Sixteenth edition.
SIL International. Dallas.

Personal names in Nyoro

Shigeki KAJI

This paper presents an overall description of personal names of the Banyoro of western Uganda. The Banyoro have several types of personal names, among which three, namely the birth name, the Cristian or Muslim name, and what is commonly referred to as “pet names” in English, *empâ:ko*, are essential for any Nyoro person. In addition to those three, some people have a nickname, even a self-giving nickname. The Banyoro do not have a family name traditionally, but some people have begun to use their father’s birth name as if their family name.

The most characteristic among those names is the birth name in terms of its linguistic forms and meanings. We analyze birth names as messages addressed by the namer who is the father of the baby to other persons including his family members, neighbors, and even to God. In traditional nonliterate setting, birth names serve as a useful means to inscribe messages to others because messages are kept for several decades, that is, as long as the person lives, and they are transmitted widely as the baby grows up and moves around.

Other types of birth names such as twins’ names, names for breech babies, new type names using English words, and the ruling Babiito clan members’ names are also described in this paper without forgetting the kings’ names and titles.

Faculty of Sociology

Kyoto Sangyo University

Motoyama, Gamigamo, Kita-ku, Kyoto 603-8555, Japan

E-mail: skaji@cc.kyoto-su.ac.jp